

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：天使の創造

神の宮廷に侍する天使

天地の創造主である神についての要理を結びとする前に、神の啓示の中にあるもう一つの明らかな点について考えておかなければなりません。純粹に靈的な存在、聖書に言う「天使」のことです。天使の創造は、特にニケア・コンスタンチノーブル信経にはっきり示されています。「われは信ず、唯一の神、全能の父、天と地、見えるもの見えざるものすべての造り主を。」周知の通り人間は、被造物の中でたぐいえない位置を占めています。肉体を持っている点では見える世界に属し、肉体に生命を与える精神と靈魂を持っている点では、見えるもの見えざるものとのいわば境界線上にいます。啓示の光を受けて教会が告白する信経によると「見えざるもの」とは、完全に靈的な存在つまり見える世界の中にあつて活躍するものではない被造物、別の世界に住んでいるものです。

昔も今も、天使に関しては、優れた論もあれば馬鹿げた意見も出ています。時にはひどい混乱も。本来、教会の信仰に無関係なものが教会の信仰であるかのように思われたり、逆に真理の重要部分が軽視されたりしていることは否定できません。聖書がふつう「天使」と呼ぶ靈的被造物の存在は、すでにキリストの時代にサドカイ派の否定するところとなっていました。(使徒行録23・8参照) いつの時代にも、唯物論者と合理主義者たちは、天使を認めようとしません。しかし、現代のある神学者が看破したように「天使を反故にしたければ、聖書と救いの歴史をそっくり書きなおさなければならない。」(A.Winklhofer, *Die Welt der Engel*, Ettl, 1961, p.144, note2; in *Mysterium Salutis*, II, 2, p.726)

この点について教会の聖伝は完全に一致しています。教会の信経は、基本的には、聖パウロがコロサイ人に書き送った内容そのままです。「万物は子によって造られた、天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、見えないもの、玉座も、権勢も、能力も、みな子によって子のために造られた。」(コロサイ1・16) みことばであり、永遠に御父と同質であるキリストは、すべての被造物の長子です。(同1・15) すべての被造物の「すみの親石」として、宇宙の中心におられるのです。

キリストの「主権」について考えると、良い天使と悪い天使両方の存在とその活動に関する事実が決して神のおことばの中心部分ではないことがわかります。第二バチカン公会議の『神の啓示に関する教義憲章』の2番にあるように、啓示の中で神はまず、「人々を自分との生命の交わりに招き、これにあずからせるために、人間に話しかけられました。」です。すなわち「神と人間の救いに関する深遠な真理」こそが啓示の主な内容であり、それは全啓示の充満であるキリストにおいて「輝き出」ています。(『神の啓示に関する教義憲章』2参照) 天使についての真理は、ある意味で副次的なものですが、啓示の中心をなす部分と切り離して考えることはできません。「見えるもの」と「見えないもの」とを含む全被造物および、人類の歴史における神の救いのみわざの上に輝きわたる、創造主の存在と主権こそ啓示の中心です。したがって、天使たちは啓示の中身であるがゆえに時には神ご自身の名によって重大な使命を果たしてはいるけれども、啓示の最重要部分というわけではあり

ません。

創造に関するこれらすべてのことは神の摂理の秘義のなかに組み入れられていると啓示は教えます。第一バチカン公会議はこれについてははっきりと述べています。「神は自分が造ったすべてのものを摂理によって保ち、治める。『この世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてのものを巧みに司り』(知恵8・1参照) また被造物の自由な行動も含めて『神の前で隠れることができるものは何一つない。』(ヘブライ14・13)」

こうして摂理は、人間以上に知的で自由な存在である純粋な霊の世界をも自らの内に包み込んでいます。聖書には、天使について語る重要な箇所があります。天使と呼ばれる被造物に関しては実に不思議な、しかし現実のドラマも啓示されています。強くまた優しく、あらゆるものを父と子と聖霊の国の完成へと誘う神の知恵から、何者も逃れることはできません。

神の知恵である摂理は、特に純粋に霊的な存在が造られたという事実明らかに示されています。天使は人間を含む見える世界の被造物全てにまさって神に似ていることが明らかに示されているのです。人間も神の消えない似姿ではありますが、完全無欠な霊である神は、おもに、霊的な被造物のうちによく反映されています。霊的な被造物は本性から、つまり霊であるということから、物質的な被造物よりも一層神に近い存在であり、いわば創造主であり神の側近となっているのです。聖書には、このような神と天使との最高の近さをはっきりと示す箇所がいくつもあります。比喩的に、神の「玉座」、「軍団」、「天の国」などと呼ばれているのです。天使は、キリスト教の幾世紀にもわたる詩や美術に、靈感を吹き込んできました。それらの作品は、「神の宮廷」に侍する者としての天使の姿を伝えてくれます。

なぜ悪い天使がいるのか

霊的に完璧な本性をもつ天使たちは、始めからそのすばらしい知性で真理を知り、そして人間よりも完全に知った善を愛するよう召されています。愛するとは自由意志の行いですから、天使にとっても自由とは、彼らの知っている〈善〉つまり、神に従うか逆らうかのいずれかを選べる、ということになります。ここですでに人間について話したことを繰り返さなければなりません。神は自由意志を備えたものを造られましたが、それは自由であって初めて実現できる真の愛をこの世界に実現させようと御考えになったからです。そこで神は、ご自分に似せて造った被造物が「愛である」神(ヨハネ④・16)と最高に似たものとなることができるようになさいました。自由意志をもつ純粋な霊をお造りになったわけですから、当然、神は天使が罪を犯し得ることをご存じでした。しかし神の摂理は永遠の知恵であり、愛でありますから、純粋な霊が犯したたぐいなく大きな罪からも、全ての被造物によって決定的な善をひきだしてくださったのです。

事実、啓示がはっきり教える通り、純粋な霊には良い天使と悪い天使がいます。神がそのように分けてお造りになったのではありません。天使は霊的な本性を持つゆえ、自由に選択できたことが原因です。天使が自ら選んだ結果なのです。ところで、天使が選択するとき、それは人間の場合よりはるかに根本的な選択を意味します。善を見極める直観

力と洞察力を備えた知性を与えられていましたから、天使がひとたび何かを選択すると、もはややり直しはききません。したがって、天使が受けた試練（テスト）は倫理的なものであったと言わねばなりません。それは何よりも神ご自身に関する決定的な試練でした。天使は人間よりはるかに直接的かつ本質的に神を知ることができ、人間よりも先に神の本性にあずかることを許された存在でしたから。

天使たちの場合、決定的な選択は何よりも神ご自身、すなわち第一にして至高の善なる神を受け入れるか拒否するかを決めることでした。しかも、人間が自由意志で選択する場合に比べて、はるかに本質的で直接的だったのです。天使は神について、人間よりもはるかに完全な知識を持っていました。五官によって制限を受けることの無い知性の力で、天使は無限に完全な御方、第一の真理、最高の善である神を、その深みまで見ることができたのです。このようなすばらしい知性を持つ天使に、神はご自分の神性の神秘を示し、恩寵によって、神の無限の栄光にあずかるものとなさいました。霊的本性を備えた天使は、神の呼びかけに応じて超自然の高みへ上り、人間よりはるか以前に「神の本性にあずかるもの」（ペトロ②1・4参照）、父と子と聖霊の神の内奥の生命にあずかるもの、三つのペルソナの交わりの中に愛であらせられる神と親しく交わるもの、とされたのです。神は純粋な霊すべてに対し、人間よりも先に、もっと広範囲にわたる永遠の愛の交わりに加わることをお許しになったわけです。

明晰な知性によって神に関する真理を熟知していた天使たちは、その選択の結果、善と悪との二つのグループに分かれました。良い天使は、啓示の光を受けた知性には知ることのできる至高・絶対の善である神を選び取りました。神を選んだとは、自由意志の内的な力、つまり愛をすべて発揮して神の側に立ったということです。神は霊的な存在の決定的な目的となったのです。他方、神が全体的かつ決定的な善そのものであらせられることを知りつつ、神に背を向ける天使もいました。この天使の選択は、啓示された神の秘義、天使と三位一体の神そのもの、および愛により、神との永遠の友情にあずからせる恩寵に背を向けることであつたのです。被造物がもつ自由を使って悪い天使は、良い天使と同様、根本的で元に戻すことのできない決定をしました。しかしそれは、良い天使たちとは全く正反対の選択であつたわけです。愛そのものの神を受け入れようとせず、自惚れと嫌悪、果ては憎悪に動かされて神を拒み、やがて反抗を企てます。

完全な知性を授かり神について熟知しているはずの天使たちが、神に対してこのような反抗、反逆を行なうとは一体どのように理解すればいいのでしょうか。天使を、取り返しのつかない神への反逆へと駆り立てたものは何だったのか。根深い嫌悪の情が愚行となって現れたに過ぎないのだろうか。教父や神学者たちは、天使が「盲目」になったのだ、とためらいもなく述べています。本性としてあまりにも完全であつたため神の至高性を無視するまでになり、おとなしく神の支配に服することができなくなったのです。一言で言えば「仕えたくない」、造られた世界で神の片腕となって神の国を建設する仕事には絶対に加わりたくない、と宣言したのです。（エレミア2・20）反逆の霊であるサタンは、神の王国ならぬ自らの王国を求めて立ち上がり、創造主に対する最初の敵対者、摂理への対抗者、愛にあふれた神の知恵への敵となりました。サタンのこの反逆と罪、また私たち人間の反

逆と罪のことを考えると、聖書の伝える賢明な言葉にうなずかざるを得ません。「高慢には、滅びがある。」(トビア4・13)

救いの奉仕者

主イエズスはサマリアの婦人に「神は霊である」と仰せになりましたが、完全な霊である神の似姿を特に具現しているのが純粋な霊的被造物である天使です。したがって、天使は神に最も近い被造物と言えます。また、神の啓示を人間に伝えるにあたり、すこぶる重要な働きをするのも天使です。この点は福音書の中で天使に与えられている呼び名からも明らかです。と言うのも、〈アンジェルス angelus〉とは「使者」を意味する言葉であり、また旧約聖書の中のヘブライ語〈malak マラク〉はもっと具体的に「代理人」とか「大使」を意味する言葉だからです。霊的被造物である天使は、神と人間との仲介役、あるいは媒介役を果しています。したがって、ヘブライ人への手紙の中で天使の名にはるかにまさる名を授けられたと記されているキリストは、まさに仲介の奉仕者ということになるわけです。(ヘブライ1・4参照)

この造られた世界が神への賛美のしるしとして創造主の栄光を謳うとき、特に天使がこれに参加します。「天において主をほめよ、高きところにて主をほめよ、天使らはみな主をほめよ。」(詩篇48・1~2) 「天使たちよ、みことばの声を聞き その命を行う力ある者よ、主を祝せよ。」(同02・20) 詩篇はこのように歌っています。これらの詩篇から、「神の命を行う力ある者」である天使は、神の摂理にしたがって、確かに神の被造界主宰にあずかっていることがわかります。そして、人間に対する特別のはからいと心遣いは天使に特に委ねられているのです。たとえばトビアの書に、人々の願いと祈りは天使によって神の御前に取り次がれる、と記されているように。(トビア3・17、12・12参照)

詩篇作者は次のように歌います。「主が天使たちに命じ、あなたの道を守られたからだ。足が石につまずかぬよう、彼らがあなたを手で支える」と。(詩篇90・11~12参照) 愛深き神の大使としての天使の働きは、人間一人ひとりに及ぶものであることはもちろん、特別の任務を担っている個人にも、またすべての国々にも広く及ぶものです。(ダニエル10・13~21参照)

主キリストの救いのみわざにおける天使の役割は、新約聖書の至る所で強調されています。最初は神の御子の「託身」の秘義において、さらに洗礼者ヨハネの誕生を知らせる時(ルカ1・11参照)、キリスト御自身の誕生を知らせる時(同1・26参照)、マリアとヨゼフに説明と命令を伝える時(同1・30~37、マテオ1・20~21参照)、主の御降誕の夜に羊飼いたちに指示を与える時(ルカ2・9~15)、お生まれになった初子をヘロデの迫害から守るようお命じになった時(マテオ2・13参照)など。すべて重要な瞬間に天使が大きな役割を果たしているのに気づきます。福音書をさらに読んでいくと、主イエズスの荒野での四十日間の断食中にも天使は現れています。(同4・11参照) そしてゲッセマニでの祈りの時にも。また、主キリストの復活の後、急ぎ墓に着き、墓が空になっているのに気づいて驚いている婦人たちにも天使は若者の姿で現れて言いました。「恐れるな。わたしはあなたたちが十字架に付けられたイエズスを捜しているのを知っている。だがここにはましまさぬ。

お言葉どおり復活された。すぐに弟子たちに知らせに行け」と。(同28・5～7) それから、主イエズスの御出現をいち早く目のあたりにしたマグダラのマリアにも二人の天使が現れます。(ヨハネ20・12～17、ルカ24・4参照)

さらに、主イエズスの昇天後、弟子たちに現れて言いました。「ガリラヤ人よ、なぜ天を見つめて立っているのか。今あなたたちを離れて天に昇られたあのイエズスは、天に行かれるのをあなたたちが見たように、またそのようにして来られるであろう」と。(使徒行録1・10～11) 「天に昇って神の右に坐られる。そして天使たちと能力と勢力はキリストに服従する。」(ペトロ①3・22) 聖ペトロはこのように記しています。天使はまさに、キリストの天使なのです。

世の終り、すなわちキリストの再臨の場面にまで進んでいくと、どの共観福音書も異口同音に「人の子は栄光のうちに、聖天使たちと共にくる」と記しているのがわかります。(マルコ8・38、マテオ16・27、25・31〈最後の審判〉、ルカ9・26、テサロニケ②1・7参照) 純粋な霊である天使は彼らにふさわしいやり方で、神の神聖さにあずかるばかりでなく、キリストが救いのみわざを成就なさる重大な瞬間にも、主のお側につき従っています。

教会と聖伝と教導職はずっと、救いの奉仕者としてのこのような性格と働きを天使たちのものであると考えてきました。

救いの歴史と天使

聖書の光に照らされて、教会は、純粋な霊として天使が存在することを、何世紀にもわたって宣言してきました。ニケア・コンスタンチノーブル信経で宣言し、第四ラテラノ公会議でこれを確認し(1215年)、さらに第一バチカン公会議における創造の秘義の教義憲章で繰り返し述べてきたのです。「時間の初めから神は霊的被造物と物質的被造物、すなわち天上と地上との被造物をひとしく無から創造し、次にこれを合わせた靈魂と肉身から成り立っている人間を創造された。」(『デイ・フィリウス』 DS 3002) 言い換えれば、神は初めから両方の実体、すなわち、霊的実体と肉体的実体、天使の世界と地上の世界をお造りになったということです。神の法の下に確立され、時間で測られる世界の枠組みの中に、靈魂と肉体からなる人間をお造りになるという意図のもとに、神はすべてのものを同時に創造なさいました。

教会の信仰は天使の存在を宣言すると共に、天使が備えている特別の本性をも認めています。純粋な霊的存在である天使は「非物質的」であり、「不死のもの」です。(特別な状況のもとで、人間のために何らかの任務を遂行する時、目に見える姿で現れることもあります)が、天使は本来「からだ」を持っていません。したがって、天使は全被造物に共通の腐敗性の法則から免れています。主イエズスは天使の特性にふれて次のように仰せられました。来世において復活した人は「もう死ぬことがない、彼らは天使に似たものだから」(ルカ20・36)と。

霊的被造物である天使は、知恵と自由意志とを持っており、この点では人間と同じですが、いくぶん人間より勝っています。ただし、すべての被造物には本来限りがあるので、天使にも限界があります。また天使は個々の存在(位格を備えた存在—ペルソナをもつ存

在)であり、それゆえ神の「似姿」、神に「かたどられたもの」です。聖書は天使と大天使を区別していますが、それだけでなく、ラファエル、ガブリエル、ミカエルといった、個々のものを示す名で天使を呼ぶ一方、熾天使、智天使、座天使、能天使、主天使、権天使といった「集合的」な名でも呼んでいます。聖書が類比的、また表象的な性格の言葉を使っていることを考えると、天使は、社会を成しているかのように、役割や完全性の程度に応じて順位が付けられ、階級が決められているという結論に至ります。古代作家や典礼文集も、天使に階級（アレオパゴのディオニシウスによると九つの階級）があることを伝えていますが、特に、教父の時代や中世の神学は、この天使の特性に絶対的価値を置くことはなかったとしても、決してそれを容認せず、教理的なあるいは神秘的な言葉で説明を試みてきました。聖トマスは本体的（存在論的）特質、つまり認識の働きと意志について、また純粋な霊的被造物がもつ「貴さ」について研究を深めました。と言うのも、天使のもつ「威厳」にふれ、天使の中に純粋な状態の霊にふさわしい知的能力と活動力を見出したからです。そして、知恵、愛、自由、神への従順、神の国への道、といった人間の思考を鼓舞し、悩まず究極の問題に、かなりの光明を投じました。

私たちがここで扱っているテーマは、現代人の物の見方からすれば「かけ離れたもの」あるいは「大して重要でないもの」かもしれません。しかし、教会は、創造主である神についての真理と、天使についての真理の両方を、すべて誠実に伝えて初めて、人々に多大な奉仕ができると確信しているのです。たしかに、人であり神であるキリストによる神の啓示の中心は、人間であって天使ではありません。これは私たちも信じているとおりです。けれども、人間一人ひとは、肉体だけでなく霊魂を持った存在であること、そして人間のために人間と共に神の摂理に仕える位格的な存在（天使たち）の共同体の中であって、真に重要かつ効果的な救いの計画にあずかっていることを明らかに示してくれるのが、純粋な霊的被造物と人間との宗教的な出会いなのです。

授かった自由を最初に試されたとき、神と栄光と御国を選んだ純粋な霊は、聖書と聖伝において、彼らにふさわしい「天使」という名を与えられました。この天使たちは神のみ前に顔と顔を合わせ、至福に輝く深みから流れ出る至上の愛に包まれ、至聖なる三位一体の神と交わっています。「天使は天上において、常に天にまします父の前に立っている。」（マテオ18・10）主イエズスはこのように仰せられましたが、「常に父の前に立つ」ことは最高の神礼拝を表しています。これは全宇宙の名のもとに行なわれる「天の礼拝」です。教会が行なう地上の典礼は、特に頂点に達する瞬間に、絶え間なくこの「天上の礼拝」にあずかります。世界中で、毎日、毎時間、教会はミサ聖祭の中心である聖変化の祈りの前に、至福なる神の栄光を歌うよう「天使と大天使」に願います。そして私たちも神を賛美し、言葉では表せない神の秘義を知り、神を最初に礼拝した天使たちと共に、心を合わせて歌います。

啓示によれば、栄光に輝く三位一体の神の生命にあずかっている天使は、神の摂理によって導かれ、人間の救いの歴史においてその役割を果たします。「天使たちは、救いの世継になろうとする人々に奉仕するために送られた奉仕の霊ではないか」（ヘブライ1・14）とヘブライ人への手紙の著者は尋ねています。これは聖書をもとに教会が信じることであり、

教えることでもあります。これによって私たちは、良い天使の仕事が、人々を守り、人々の救いを切に望むことであると知るのです。

天使に関する表現は聖書の至る所に出てきます。たとえば、詩篇90はすでに何度か引用しました。「主が天使たちに命じ、あなたの道を守られたからだ。足が石につまずかぬよう、彼らがあなただを手で支える。」(詩篇90・11～12) また主イエズスは子供たちについて話し、子供たちを侮らないように警告なさる場面で「この子らの天使」と表現なさいましたし、さらにキリストを認めたものと拒んだものに対する最後の審判では、天使が証人の役割を担っています。すなわち「人々の前で私の味方だと宣言する人を、人の子もまた神の天使たちの前で彼の味方だと宣言する。人々の前で私を否むものは、神の天使たちの前で否まれるだろう。」(ルカ12・8～9、黙示録3・5参照) このように天使が神の審判において証人の役割を担っているとすれば、明らかに天使は人間の命に関与していることとなります。終末の話の場面ではもっと強調され、歴史の終り、キリストの来臨の日、つまり世の終りに、主イエズスは天使をお遣わしになると書かれています。(マテオ24・31、25・31～41参照)

新約聖書、とりわけ使徒行録は、人間と人間の救いに向けられた天使の気遣いを如実に伝えるいくつかの事実を描いています。主の天使によって、使徒たちが牢から出て自由になったことなど。(使徒行録5・18～20) なかでも、ヘロデから殺すとおどされていたペトロが助け出されたこと。(同12・5～10) また、最初に改心した異教徒の百夫長コルネリオにペトロが働きかける時、神の天使によって導かれたこと。(同10・3～8、11・1～12) そして、助祭フィリッポがエルサレムからガザに下る道を行く時も、同じように天使に導かれたことなど。(同8・26～29)

このような事実をいくつか見るだけでも、なぜ教会が、天使は人間への使者の務めを託されていると確信し、守護の天使への信仰を告白するかが明白になります。さらに記念日を定め、典礼でたたえ、「神の御使い」に絶えず祈り、その保護を願うよう勧めるかが、よくわかるでしょう。「信者はみな、命へ導く教師として、また指導者として、天使を傍にいただきます。」(聖バシリウス『エウノミウス論駁』III, I、聖トマス・アクィナス神学大全』I, q.11, a.3) この「神の天使」への祈りは、聖バシリウスの美しい言葉で宝のような祈りになりました。

教会が三位の天使を典礼上でも礼拝していることに注目しましょう。聖書の中で、この三位の天使はそれぞれの名前で呼ばれています。まず、大天使聖ミカエル。(ダニエル10・13～20、黙示録12・7、ユダ9章参照) その名は良い霊がもつ本質的姿勢を表しています。実際「ミカ・エル」とは「神に似たものは誰か」という意味で、天にまします「御父のみ前に立つ」天使の力添えによって私たちは救いにあずかることができるという事実を表しています。二番目は、御子の託身(受肉)の秘義に特に結ばれているガブリエル。その名は「私の力は神」「神の力」という意味で、託身が全能なる神の創造の極みにおける至上的ものであることを表しているようです。(ルカ1・19～26参照) そして三番目は、ラファエルと呼ばれる大天使。「ラファ・エル」とは「神は癒される」という意味です。この名は旧約聖書のトビアの書(トビア12・15～20他参照)でよく知られていますが、特に保護と世

話を常に必要とする神の小さな子供たちをこの天使に委ねることはすこぶる重要です。

このように考えてみると、この三位の天使、ミカエル、ガブリエル、ラファエルは、それぞれの方法でヘブライ人への手紙の著者の述べる真実を映し出していることに気づきます。すなわち「天使たちは、救いの世継になろうとする人々に奉仕するために送られた奉仕の霊ではないか。」(ヘブライ1・14)

自由——この神秘

天使のうちのあるものが人類に対する神の救いの計画に背き、神に対立するものとなるのに用いたもの、自由の神秘について探っていきましょう。

福音史家聖ルカは、弟子たちが初めての布教で得た実りを手に喜びいさんで主の許へ戻ったとき、主イエズスの仰せになった誠に印象的な言葉を伝えています。「私は天に閃く稲妻のようにサタンが落ちるのを見た」と。(ルカ10・18) このような言葉で主は、神の国を宣言することは悪魔に対して勝利を得ることであるが、天の国を築くことは、悪い霊の攻撃に絶えず我が身をさらすことでもあり、お教えになったのです。この点を考えれば、私たちはいつも戦いにふさわしい準備を整えていなければならないことがわかります。この戦いは(黙示録12・7にあるように)救済史の最終段階における教会生命を特徴づけるものです。また、準備を整えるだけではありません。悪魔の影響力をはなはだしく誇張したり、あるいはその力を否定し軽視することで、教会の信仰を曲げようとする人々に対し、教会の真の信仰を明かすこともできます。

天使に関する前回のカテケーシスは、聖書が明らかにし聖伝が伝える、サタンすなわち悪魔と呼ばれる墮落した天使・悪霊について理解を深めるための準備となります。

天使のうちのあるものは神を拒み、その結果「地獄へ落ちるもの」となりました。この「墮落」は被造物である霊が、自ら自由に神とその御国を拒むという、根本的で取り返しのつかない決定をした結果です。悪魔は至上の権利を乱用し、救いの摂理と造られたものすべての秩序を乱そうと試みたのです。「あなたは神のようになる」あるいは「天人(神々)のようになる」(創世3・5参照)という人祖への言葉に、サタンのそのやり口が顕れています。こうして悪魔は「神への対立心」不従順、反抗心を人間の心に吹き込みました。いわばこれこそが悪魔の生きがいとなったのです。

創世の書の語る人間の墮落についての話は、サタンが人間を罪へ誘うために吹き込もうとする神への反目の態度に触れています。(同3・5) ヨブの書にも、苦しむ人々の心にサタンが反逆心を起こさせようと企む場面が記されています。(ヨブ1・11、2・5～7参照) また知恵の書も、サタンは罪と共に人類の歴史に入り込んだ死の職人であるといっています。(知恵2・24参照)

第四ラテラノ公会議において教会は、悪魔(サタン)やその他の悪霊は「良いものとして造られたが、自らの自由意志で悪いものとなった」と教えました。実際、ユダの手紙には「自分たちの優先権を守らず、自分の席を捨てた天使たちを、主は永遠の鎖で縛り、偉大な日の審判まで暗闇の底にとどめられた」(ユダ6章)と記されています。またペトロの第二の手紙で、悪魔は「罪を犯した天使たち」と呼ばれ、神は「赦さず闇の淵に捨てて審

判のときまで見張らせた」とあります。(ペトロ②2・4) 神が天使の犯した「罪をお赦しにならない」のは、明らかに、天使がいつまでも罪の状態に留まっているからです。彼らは最初の選択、つまり神である至高・完全な善についての真理に反対して、神を拒む方を選択し、永久に「鎖に縛られる」ことになったのです。これを聖ヨハネは次のように記しています。「悪魔は始めから罪を犯している」(ヨハネ①3・8)「始めから人殺しだった、そして、真理において固まっていなかった、彼の中には真理がないからである」(ヨハネ8・44)と。

テキストにこのように記されていることから、サタンの罪の特質と重大性が理解できます。それは、知恵の光と啓示によって知る、完全な善、無限の愛、聖である神についての真理を拒んだ罪。何より重大な罪です。完全な霊であり、自由意志を備え、神の近くにおり、天使としての鋭い知恵を持っていただけにその罪はことのほか重大なのです。神について知っていた真理を拒んで以来ずっと、永遠に「嘘つき、嘘の父」(前出)となりました。それゆえサタンは神を根本的に否定し続け、他の被造物—神の似姿に造られたもの、特に人間—をだまし、神である善について嘘を吹き込み続けます。創世の書には、サタンが(へびの姿で)神に関する嘘や偽りを人祖に吹き込もうとする様子が描写されています。神はご自分の権能を失うまいとして人類に制限を与えられた、などといううそを。(創世3・5) サタンは人間に、「神のように」なってそのくびきから逃れよ、と誘惑したのでした。

偽りにこりかたまつたサタンは、聖ヨハネによれば「人殺し」です。それは、最初から神御自らの内に宿る超自然の生命、そして神の似姿として造られた純粋な霊と人間、すなわち被造物のうちに宿る超自然の生命を奪うもの、真理とともにある命、美に満ちた命、栄光と愛である超自然の命を奪おうとするものです。知恵の書の著者は記しています。「死がこの世に入ったのは、悪魔のねたみのためだった。悪魔に属するものは、それを体験する。」(知恵2・24) また主イエズスは警告なさっています。「むしろ体と靈魂をゲヘナで滅ぼされるお方を恐れよ」と。(マテオ10・28)

人祖の犯した罪の結果として、墮落した天使はある程度まで人間を支配する力を得ることになりました。これは教会が絶えず明言し、また宣言するところです。トリエント公会議は原罪に関する教義においてこのことを確認しましたが、それはまた、洗礼の典礼において受洗者に向けられる、悪魔とその誘惑を捨てるかと問う印象的な表現を思い起させます。(『カトリック教会文書資料集』 DS 1511)

聖書には、悪魔の支配が、人間のうちに、また肉体と靈魂の状態に及ぼした影響が多く記されています。そこでサタンは「この世のかしら」「この世の神」と呼ばれています。(ヨハネ12・31、14・30、16・11、コリント②4・4) また、人間と悪で結ばれた関係にあることを示す数多くの名、例えば、「ベルゼブル」、「ベリアル」、「汚れた霊」、「誘惑するもの」、「邪悪なもの」、「反キリスト」(ヨハネ①4・3)などがあり、「獅子」(ペトロ①5・8)、「竜」(黙示録)、「へび」(創世3章)などにたとえられてもいます。中でもギリシャ語の *diaballein* に由来する「デビル」はたびたび出てくる呼び名です。この言葉は破戒、分裂、中傷、偽りなどの原因を表しています。これらすべては、最初から悪魔の働きによつ

て起こるものです。悪魔は聖書の中で、一人として表される一方、一人では無いとも明言されています。ゲラサ地方で悪魔がイエズスに「大勢だからです」(マルコ5・9)と答えているように。最後の審判の箇所でも主イエズスも、「悪魔とその使いたち」(マテオ25・41)と表現なさっています。

聖書、とりわけ新約聖書によれば、サタンとその他の悪霊の支配力と影響力は、全世界に及ぶものです。キリストのたとえ話を思い出しましょう。(世界という)畑と良い種、人の心のうちにすでに「蒔かれていた」善を奪い去ろうとして、悪魔が麦の中に蒔いた悪い種。(マテオ13・38～39参照) また、警戒するよう忠告なさる箇所。(マテオ26・41、ペトロ①5・8参照) 祈りと断食をお勧めになる箇所を心にとめましょう。(マテオ17・21参照) 「この種のもは祈り(と断食)によらずには追い出せぬ」と、主は強い言葉で仰せになりました。(マルコ9・29) サタンの仕業は第一に人間の想像力と能力を支配し、神の掟に背かせ、人間を悪へと誘います。サタンは、あらかじめ定められていた神の救いの摂理成就を妨げようと、イエズスをも試みました。(ルカ4・3～13参照)

またある時、悪魔は物質的なものばかりか、人間の体にまで影響を及ぼし「悪魔つき」(マルコ5・2～9参照)にしてしまいます。この場合に作用する異常な(外自然の)要因を見つけ出すのは簡単ではありません。教会は、多くの事柄を悪魔の直接的な行為とみなす傾向を軽率に支持することはしませんが、自らの意志で害を及ぼし悪へと誘うことにかけて、サタンがすこぶる巧妙であることも否定できない事実です。

最後に「世がすべて悪者の配下にある」という使徒聖ヨハネの印象的な言葉を付け加えておきましょう。(ヨハネ①5・19) これは人類の歴史にサタンが存在することをも示しています。人間と社会が神から離れる時、悪魔の存在はさらに決定的なものとなるわけです。悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとなれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜しだします。自らの存在を否定させるすべをサタンは心得ています。しかし、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いのみわざを挫折させるものでもありません。むしろそれは、悪のもつ闇の力と、罪の贖いのもつ力との間の葛藤、と言う方がふさわしいでしょう。主イエズスは受難の前、ペトロに仰せになりました。「シモン、サタンはあなたたちを麦のようにふるいにかけることができたが、私はあなたのために信仰がなくならぬようにと祈った」と。(ルカ22・31)

このように考えてみれば、主イエズスが私たちに教えた、御国が来るようにと願う祈り、すなわち「主の祈り」が、他の多くの祈りと異なり、悪魔の誘惑から免れ、守られることを願って結びとされていることが、よく理解できるのではないのでしょうか。キリスト信者は父と子と聖霊に願い、御国が来るように祈り、信仰のうちに叫びます。誘惑からお守りください。悪魔と罪からお守りください。主よ、始めから不忠実だった者に誘惑され不信心に陥ることのないようお守りください、と。

※ 訳出してないもの 「キリストは悪に打ち勝つ」